

# 館報

No. 1 1974. 9

大阪外国語大学附属図書館

## 大学図書館の利用について

学長 牧 祥 三

今から三〇年ほど前、終戦直後に私はある旧制高校の図書館長をさせられたことがある。ただし、この図書館には蔵書はただの一冊もなかった。日本降伏直前に空襲の直撃弾のため数十万冊の書庫が完全に燃上してしまっただけである。私の役はその図書館復興の仕事であった。当時は世間一般が書籍に飢えていたが、私のいた学校の学生たちはもちろん、本でありさえすればどんな内容のものでも、すこしづつ殖えてゆく貧しい図書のなかから借り出して、むさぶり読んでくれた。しかし今の学校図書館、殊に大学図書館の役目の重要な点は、学生に本を読まず、読書の興味を<sup>目</sup><sup>覚</sup><sup>ま</sup><sup>せ</sup><sup>る</sup>と言うことを乗り越えて、なんらかの問題を<sup>学</sup><sup>術</sup><sup>的</sup><sup>研</sup><sup>究</sup>に採りあげるその資料を呈供することにある筈だ。ところが学問研究の方法論と言うのは、指導教師でも容易に説明してくれないし、また説明しにくいものらしい。結局たいいていの人<sup>が</sup>自得して、自己流に自らの方法を身に付けてゆく。然し学問研究の一番の基礎的方法は、その問題に関する関係図書をできるだけ多く図書館から借り出して、かならずしも全部を通読するのではなく、必要、重要と思う箇所を見つけて、これを他の数冊の参考書と比較、検討してみるのである。理解とは何か、理解とは比較することである。これが<sup>解</sup><sup>釈</sup><sup>学</sup>の第一原則である。そして第二原則は<sup>部</sup><sup>分</sup><sup>的</sup><sup>解</sup><sup>釈</sup>を<sup>全</sup><sup>体</sup><sup>的</sup><sup>解</sup><sup>釈</sup>に結びつけることである。このような事は自明のことのようで、案外学生諸君に自覚されず、初学の若い学徒が入門の扉の前で悩んでいることが多いのではなからうか。

## 館報を情報交換の場に

館長 黒 木 義 典

図書館の重要な機能のひとつが蔵書であることはいまでもない。だから蔵書数がG. N. P. のように図書館の規模を比較するための目安になるのも当然である。研究者のための、過去—現在—未来にわたる図書館の使命を考えると、たとえ現在全く読まれる見当がつかなくても蔵書しなければならない場合もありうる。しかし大学図書館は研究者、学生の利用のための施設であるから、よく利用されるということが最終的に価値を決定する要素であるとする。その意味では、たとえ100万の書があっても利用されなければ無に等しい。

単に需要のある図書を備えるということになると雑書展示場になる危険がある。当然読まれるべき本ということになるわけで、その点から図書館職員の選書能力が重要である。しかしその点を強調し過ぎると、いわゆる良書を押すつけるというもうひとつの危険がある。カロリー計算に基づく理想的献立が必ずしも食べる人の満足をもたらさないのと同じである。

この二つの要素をどのように調和させるかが図書館を正常に発展させる鍵であるとする。図書館としてはできるだけ担当者の選書能力を高め、またできるだけ書籍に関する情報や資料を利用者に提供することにつとめる。利用者の要望をできるだけ広く吸い上げることにもさらに一層努力しなければならない。この点については利用者の積極的なご協力をお願いする次第である。

この館報もそのような情報交換の場として活用したいと考える。

## 図書館利用と能率性

教授（歴史学）廣 實 源 太 郎

どこかできいた話である。ヘーゲル全集が一番売れているのはドイツで、その次が日本であると。また、アメリカで出版されているある心理学関係の雑誌は、無論、アメリカ国内を最大の顧客としているが、その次は、三位を大きく引きはなして、日本が御得意先になっている。私の記憶に間違いがなければ、前者は日本の文化的程度の高さを誇る意味で引用され、後者の場合は、研究費の使用についての効率の悪さを説くために語られていたように覚えている。

私は図書類の買い方について、上記の話が示しているような二面性は確かにあると思うし、従って、大学図書館の図書購入についても同様のことがいけると考える。ヘーゲル全集が本国をのぞいては、最大市場になっていることが、直ちに、日本でヘーゲルが精密に読まれ、研究水準が海外第一位であることを意味せず、日本の心理学研究の水準が世界の最先端をゆくものとはならない。しかし、それが日本人の関心のあり方を示す何らのデータにはなりうるし、もともと、図書とは、常に完全に読むものだけを購入するものではない。一生かかっても読まないであろうことを予想しながらも、なお、いわば人格的に買うことが稀ではない。それはそれで十分に意味のあることである。

しかし、私のいいたいことは、要するに、心がまえのバランスである。応接間にブリタニカ百科辞典を揃えることも結構である。だがわれわれは、あり余る研究費、図書費をもって事を進めているのではない。私の専攻分野で例をひこう。ある種の史料集や雑誌、例えばアメリカン・ヒストリカル・レビュー、レビュー・イストリク、ヒストリッシェ・ツァイトシュリストなど、伝統的に先進国とされる国の代表的な歴史雑誌は、どんな大学でも買っている。極端にいえば、女子短大でもそのいくつかは購読しているし、ある大学では、教養部の歴史学科も文学部の史学科もとっている。つまり、その気になれば、いつでも見ることが可能なのである。現に、外大ではそれらの雑誌を購入していないが、私自身はほとんど不自由することなく、その内容に目を通してはいる。

図書費の不十分さは事実として存在する。従って、それに対する不満は常に出てくる。だが、それを少しでも克服しようとする工夫も不足している。西洋史でいえば、せめて雑誌関係だけでも協定を結び、古代史関係のものはA大学で、中世史関係はB大学、近代英国史はC大学が、といった風にしておけば、ある種の雑誌は日本中にあり、ないものはどこにもないという現象が、少くともかなりの程度は防げるのではないだろうか。勿論、このためには、一種の情報管理機関とサービス機関が必要になる。また、その機関の充実の度合いによって、協定サークルの範囲は大き

くも、小さくもなるだろう。さらに、配置教官の都合も考えて、ある程度の自由、自主性も必要であろう。

「見たい時に、机の上にある」のが図書の理想である。けれども、そこからくる非能率性があるという反面も考えておかねばならない。そういう意味でのバランスをどこに設定するかということが、われわれにとって、かなり緊急にして、大切なことではなからうか。

## 附属図書館の50年 (1)

大正11年(1921年)11月11日、官立大阪外国語学校の開校式が挙行された。文部省直轄学校の歴史が始まったのである。その席上「……図書閲覧室木造平家建48坪、工費268円……、という報告がなされ、更に「…目下工事中のものは鉄筋コンクリート造り3階建16坪の書庫……と説明が加えられている。これが図書館の創設当時の規模である。確かにあの第2次大戦の大阪大空襲(昭和20年3月13日)により、書庫を残して凡べて鳥有に帰した、大痛手をうけるまでは、この小っぱけな閲覧室には、その中央に約30種ほどの高さの木の衝立を取付けた、粗末な木製の、向い合せに坐れるようになった、6人掛けの閲覧机が、合計6脚許り、2流れに配置されており、新聞架が4個ほど置かれているに過ぎない。収容人員が、やっと36人程度の大変質素なものであった。それでも、これまでの学生にとっては、そこでは、『改造』を読み『中央公論』を借り出し、あるいは専攻語学の勉強のために種々な辞書類を借覧でき、倦きると『英語青年』にその疲れを癒すことのできる唯一のオアシスであり、厳肅な勉学の場であった。仮令、その簡略藤椅子たるや、直径30種の円形藤製座席に曲木をくっつけた、長半円形の背もたれの付いた夏椅子のような粗末なものであっても。……

これが、昭和29年になって、漸やく新しい設計の下に、それでも焼失を免がれた唯一の書庫との関係から、止むなく現在位置(大学敷地の北西隅)に、小規模ながら、近代的な設備の図書館が、建てられ、100坪近い大閲覧室には全く往昔の面影の片鱗さえも窺知できないのである。即ち、古い特定の人達のみ利用していた図書館から、全く一転してすべての利用者がいつでも利用できる、利用者ための大学図書館へ変身してしまったのである。爾来20年——この一新した図書館にも、敷地の狭隘さに加え、現在のよう、学生数と、図書資料の、増大(量)に伴う、この新規の図書館の狭隘化は、全く否定できないが——茲に再び広大な天地を求めて、更に発展する以外に方途がない、というような窮地にまで立ちいたった。

戦災直後、一時期、学舎が大阪市を離れ、京都市との中間にある高槻市へ移転していた頃、附属図書館も、この所謂高槻兵舎(工兵隊)時代の非常に物資の欠乏困窮時代を経験したのである。勿論、図書資料類は殆んど入手できず、

日常業務が総て研究者・学習者の要求に基き、その資料さがしに終始するというようなことの連続であった。したがって、殆んど古ぼけた大学の蔵書のみが、貴重視され、種々な図書が、何日の間にか紛失してうとうという事態が、日常茶飯事化するのではないかとさえ思われるような風潮であった。館員は資料の紛失防止に汲々としていて、遂には、4～5人の館員では手が廻らず、蔵書目録、検索カード等の道具の焼失した状態であったにも不拘、止むを得ず、自由接架を禁止するという最悪の措置を執らざるを得ない有様であった。……そして、数年后、再び大阪学舎の復旧工事、大阪への復帰、あの非常に手数がかかり、困難の極みである附属図書館の全面移転という難事業、……かくて新築図書館の完成（昭和29年）、そして20年、現在の大学附属図書館へと成長発展してきたのであった。

（事務長 出口 安正）

## ブルガリアの言語、歴史、文学

ブルガリア語はバルカン言語圏で特異な地位をもつ南スラブ系の言語である。ロシア語と同じキリル文字を用いている。1945年改正された新正字法によって、アルファベット30字となり、ロシア語より3字少ない。名詞、形容詞の格変化を消失したが、複雑な古い時制を残している。古代ブルガリア語はいわゆる Church Slavism をロシア語に移入したが、現代ブルガリア語はロシア語の影響を多分に受けている。

つぎに、ブルガリアの言語、歴史、文学にかんする蔵書を掘りだして、学習者の参考に供したいと思う。

### 1. 語学入門書

\* A Bulgarian Textbook for Foreigners, Sofia 1965.

テキスト、練習問題、語彙が付いていて独習書として適当である。

\* Beginning Bulgarian, Mouton, 1962.

形態論を中心とした大学教科書の入門書である。

\* Wir lernen Bulgarisch sprechen.

東独の袖珍語学シリーズの実用的入門書。テキストを主とし、文法を簡潔に説明している。別にレコードがあるので、発音の習得に活用できる。

\* Маслов, ю. с. Очерк Болгарской Грамматики, М. 1956.

中、上級向の必読書である。難解な動詞の時制、シタクスの用法を理解するのに役立つだろう。

ところで、肝心の辞書は、適当なものがない——というのは大部分がブルガリア人のために編さんされたもので、外国人の学習用につくられたものでないからである。その中で、Г. Чаклов その他の Болгарско-Английски Речник、

C. 1961. はまず利用できるものである。

### 2. 歴史、文学

以下、ブルガリア語の原書だけをあげておく。

\* История на България в 3 тома, С. 1961—1964.

ブルガリア科学アカデミー歴史研究所編。原始共同体の発生から、第2次世界戦後後の社会主義国家誕生をへて1962年 БКП 第8回大会まで記述している。

\* История на Българската Литература, Том 1, С.

1962. ブルガリア科学アカデミー文学研究所編。9世紀から18世紀中葉までの「旧ブルガリア文学」史である。4巻で完結し、現代文学に及んでいるが、所蔵しているのは第1巻だけである。

最後に、百科辞典のあることを付言しておく。

\* Кратка Българска Енциклопедия в 5 тома, С. 1963—1969.

（第二運用係 平野 曠）

## 世界各国の有名新聞が図書館に!?

### Archives 69——二次資料紹介シリーズ(1)

Archives 69は、要するに、新聞の切抜き（勿論コピーしたものです）を集め、それに索引をつけた資料ということができます。

切抜かれた新聞は、世界16カ国にわたる有名新聞30紙、（1974年6月現在）で下掲の通りです。切抜きの対象となった記事は、本学に密接な関わりをもつところの国際問題に限定されていますが、その主要部分は、むしろ世界各国の政治、経済に関する記事が占めています。

本学との関連でいいますと、諸外国の政治、経済を研究する上で、一次的な資料として、あるいはその論評としてこれらの新聞記事は、図書や雑誌とまた異なった重要性を持つものと思われまます。

これら新聞記事の選択にあたっては、Archives という名称が示すように、純然としたニュース記事は除外し、ある程度の永続的な資料価値をもつ background material（例えばドキュメンタリー資料、分析的記事、重要事件の詳細な要約、調査記事、論評など）を対象としていますので、十分研究資料として耐えうると申せましよう。

新聞記事のコピーとは別に、必要な部分をさがし出すための索引が用意されています。これによって、例えば石油問題、EECなどの主題や若干の件名から必要とする記事を探せますし、又各国の政治、経済については地域名・国名から検索できます。索引は半月分のものがまず発行され、次に3カ月分累積されたものが続き、最後に年間の累積版が発行されます。ごく最近の情報は半月分の索引で、遡及して組織的に資料を探す時などは年間索引が重宝といえましよう。

Archives 69 にとりあげられた新聞について見てみますと、英独仏の3カ国語で書かれたものを中心としています。(ブラウダ、イズベスチャは英訳記事) そのためでしょうが、30紙の内、半数の15紙がイギリス、フランス、ドイツのものに占められ、ヨーロッパではスペイン、イタリアの新聞がなく、アメリカは1紙、又アジア、ラテンアメリカでも特定の国に偏っているように見うけられます。しかし1973年の年間索引によって、切抜き記事数の地域別比率を出してみますと、ヨーロッパを100とした場合、アジア85、アフリカ24、北アメリカ39、ラテンアメリカ12、オセアニア7となっており、上記の言語の制約のためかラテンアメリカが若干少ないようですが、アジア、アフリカ地域の記事はかなりよくカバーされていると思われる。

図書館では1973年1月からこの資料を購入しています。索引は洋雑誌コーナーに備えられていますので御活用下さい。

日本	Japan Times
インド	Statesman Weekly, Times of India
中近東	Egyptian Gazette, Jerusalem Post l' Orent (Lebanon)
イギリス	Financial Times, The Guardian The Guardian Weekly, Observer The Times, Sunday Times
西ドイツ	Frankfurter Allgemeine Süddeutsche Zeitung
東ドイツ	Neues Deutschland
スイス	Neue Zürcher Zeitung
フランス	Le Mond, Le Mond English edition l' Humanité, Le Figaro International Herald Tribune
ソビエト	Izvestia, Pravda
北欧	Finnish Features, The News of Norway
アメリカ	New York Times
ラテンアメリカ	La Prensa(Argentine) La Opinion(Argentine) Marcha(Uruguay)

●二次資料紹介シリーズについて

二次資料とは「ある事実の発見 (fact-findings)、意見、理論が最初に発表された記録である一次資料に何らかの加工・編集を加えて、もとの一次資料の内容や所在に案内する tool (細谷新治)」であると定義されています。具体的には、文献目録、文献案内、雑誌や新聞記事索引、文献の所在を示す総合目録、定期刊行物の目次を編集したコンテンツ・シートなどがそれに相当します。

これら二次資料によって、より組織的な、又より網羅的な、そしてまたより適切な文献の探索が可能になると申せましょう。

このシリーズでは情報の洪水と呼ばれる状況の中で、ますますその必要性を高めてゆく二次資料を、本学図書館に受入れられたものについて逐次紹介していきます。

(第二運用係長 青山 弘)

蔵 書

(昭和49年5月現在)

和漢書 Oriental Books		洋 書 Occidental Books	
総 記	27,520	総 記	11,274
哲 学	5,003	哲 学	4,612
歴 史	12,509	歴 史	13,324
社会科学	15,010	社会科学	7,584
自然科学	5,008	自然科学	4,616
工 学	998	工 学	819
産 業	2,501	産 業	2,049
芸 術	2,504	芸 術	2,562
語 学	17,512	語 学	24,188
文 学	36,526	文 学	31,465
(石浜文庫)	25,699	(石浜文庫)	2,294
計	150,790	計	104,787

昭和49年度 図書館委員会委員名

委員長	広 実 源太郎	(歴史学)
副委員長	勝 藤 猛	(ペルシア語)
委 員	赤 木 攻	(タイ語)
委 員	岡 崎 正 孝	(ペルシア語)
委 員	丸 山 忠 雄	(ロシア語)
委 員	池 田 廉	(イタリア語)
委 員	赤 木 富美子	(フランス語)
委 員	斉 藤 勝 弥	(Ⅱ・英語)
委 員	池 上 日出夫	(Ⅱ・英語)
委 員	出 口 厚 美	(Ⅱ・イスパニア語)
委 員	生 森 将 人	(留学生別科)
委 員	崎 山 理	(言語学)

日本人が外国語を使うのは主として本を読むためであった。そして外国の名著を日本に紹介するのが学問であり、それを享受するのが教養であった。外国とは、古くは中国であり、ついでヨーロッパであり、ついでアメリカである。これらは日本が服従する関係にある。その他の地域は、日本が支配する関係にあるか、さもなければまったくの無関係であった。この事態はしかし徐々に改善に向かっている。

したがって今まで無関係であった西アジアについての日本の研究がおくれ、西洋人の後を追う形をとったのはやむをえない。アラビア語やペルシア語の辞書や文法書も、英語によるものが一般に用いられている。この意味で西洋に先学を求めるなら、西アジアのとくにイスラム以後については Bernard Lewis (1916— ), イランについては Edward G. Browne (1862—1926) が挙げられる。このふたりの著作がまず推薦に値する。

次に現地語による文献を求めるとして、私の専攻するペルシア語の分野で、有名な作品をさしおいてあえて推したいのは、テヘラン発行の『よい子供のためのよい物語』全6巻である。子供用の本と軽んじてはならない。そこには「カーラとディムナ」「マルズパーン・ナーメ」「カーブース・ナーメ」「コーラン」などの古典から選ばれて書き直された物語が含まれていて、西アジアの民衆の生き生きした知恵を教えてくれる。

さてアジアの東端にある我々日本人はアジアの西端の事象をどう見ればいいのか。研究の歴史で西洋に劣るとしても独自の観点からの見解を出して世界の学問に貢献できはしないか。例えば、イスラム教の開祖マホメットと、その同時代人であるわが聖徳太子の比較はどうか。またイスラム教は仏教と比較することによってその性格がもっともはっきりするのではないか。そのためには自国をより深く知り、そして主張せねばならないということになる。

フランスに留学して、17世紀末までの東洋旅行記とその影響を調べたことは、私にとって、以後の研究方法の手がかりを与えてくれた貴重な経験だった。それは同時に、一生を本と過ごす決心のきっかけにもなった。というのは、この研究は、パリの国立図書館の、膨大な文献がなかったら、完成しなかったものだからである。あの広大な古びた建物へ、初めて足を踏み入れたとき、私はまるで大海に漂うような心細さを感じた。著者の総合索引の古い方だけで、100冊ほどの部厚な本が並んでいた。索引に読み耽って、何か見つけて借出すと、早速、300年の年月を、皮表紙にしみこませた本が運ばれてくる。よく整理された宝庫の感じだった。わからないことは、別室に相談係(年輩の婦人も多い)がいる。たとえばモパサンのことをきいても、全部読んでいるといった、博識な人々で、国立図書館にもない稀覯本だと、Bibliothèque Mazarine などを紹介してくれた。ソルボンヌにも立派な附属図書館があるが、最も印象に残っているのは、国立図書館の大閲覧室である。円天井の、遠くかすむほど高いところまで、壁は本で披われ、指ほどにみえる人々が、何階もあるエレベーターで昇って本を出し入れしていた。私はそこで、思想が世紀から世紀へ伝わってゆくのを目のあたりに見たのである。戦争に敗けてから、世界をよくするために人間の考えることなど何の力もないと思っていた私にとって、それは大きな転換のきっかけになった。建物がなくても、そんなことは悟っていなければならない筈であるが、目の前に見ないとあの実感はわからない。日本にもこんな大規模な図書館がほしい。せめて全国のあらゆる図書館の総合目録があって、どこからでも自由に借出せるシステムがないものだろうか。

### 教育機器の利用状況について (昭和48年度)

本学の教育機器の代表的なものは、L L です。16語学科のうち15語学科がL L 授業を行なっています。15語学科中毎週利用しているのは、12語学科です。

12語学科のL L 授業のなかに他の教育機器を利用しているのは、3語学科です。利用されている教育機器は、主として、OHP、スライド、映写機、VTRです。

本学には、テープライブラリもあります。テープの貸出は学内だけで、自習室を利用しなければなりません。自習室の利用状況を見ますと中国語(47%)、イスパニア語(14%)、ドイツ語(11%)の順で3語学科で全体の72%です。

教育機器の利用がどのように行なわれているかを見るには、自習室の利用とL L 授業がどのように行なわれているかに関係していると思われます。教育機器を導入した語学教育を進めるには、どうすればよいか、3語学科の利用状況が何かを教えているのではないのでしょうか。

(視聴覚資料係長 川村 義三)

## MARCと目録政策

LCによるMARCⅡカードが国立大学に限って配布されてから二年目になる。これと昭和46年度から実施されるようになったNDL(国会図書館)カード受入の予算化は、従来の各館独自の目録作成作業の省力化にとって大きな影響を与えることになった。MARCⅡカードの是非についてくわしく書くつもりはないが、MARCⅡカードが受入れられることになると大学図書館の業務の流れも大きく変化し、それがkeyとなって従来から考えられてきた大学図書館や他の情報機関との関係もより密になることは間違いない。

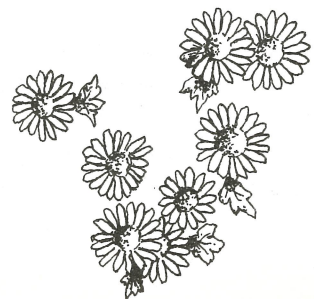
いうまでもなく、MARCⅡカードをほとんどの図書館が受入れると、1)目録情報の互換性があること、2)記述やデータ・エレメントに標準化がはかれること、3)Costが軽減されることになる。普通目録政策が効果的に行なわれるには上記三つのMeritを前提として、究極的には共通の目録(全国書誌目録、National Union Catalog, National Bibliographyや地域書誌目録、Regional Bibliography, 主題別書誌目録、Subject Cataloging)が作られ、それによって収書計画(NPAC=National Program for Acquisitions and Catalogings, 地域的な分担収集Regional Shared Acquisitions)が実行されることになる。MARCⅡカードはこうした目録を容易に、しかもその目的によって作り出すことが可能である。こうしたことから地域的、主題別の大学図書館の相互協力はより緊密になり、共通の目録を使って、容易に情報の提供を可能にすることになろう。

しかしこうした目標に近づくことは容易ではなく、まだまだ重要な問題が山積している。図書館内部を考えると、MARCⅡカードを受入れる際に目録の後回し(Ddeferred Cataloging)が考えられ、それと発注・受入時におけるカードの利用(記述データはそのまま目録に生かされるから)が考慮される結果、図書館業務の流れを大きく変え、更に閲覧・参考部門とのかかわりあい(例えば未整理図書、MARCⅡカード受入れまち図書の処理)にも影響を与えることになる。又MARCカードは文字通り機械可読(Machine Readable Card)のものであるが、本学のように可読する機械すらない大学も多い。これらはいずれ主要なコンピュータをもった地域センター館との関係で解決されようが、MARCを利用する最大の効果は、主題やあるカテゴリーなど、必要とする情報を迅速に、安く作り提供することにある。学術月報によれば、研究者が情報を入手するのに困難だと認めた例は(困難でない3%、普通である59%、非常に困難である6%、不明2%)36%にもなり、適当な情報を効果的に得ることを強く望んでいることが示されている。こうしたとき、MARCのコンピュータによる情報提供のはたす役割は大きい。このことと関連して目録の

1)記述の統一、2)標準化が問題になる。最近ISBD国際標準書誌記述(International Standard Bibliographic Description)やISDS国際逐次刊行物データシステム(International Serials Data System)など国際的標準化の動きがあり、又ISSN国際標準逐次刊行物番号(International Standard Serial Number)やISBN(国際標準図書番号=International Standard Book Number)など資料固有ナンバーの標準化がなされている。しかしこれらとともに各館のもつlocationの記述や分類コードなどをどう処理するのかなどの問題も存在する。次にMARCⅡ以外の目録をどう処理するのかという問題がある。本学の例の様に洋書・和書の比6.5:3.5ないし6:4でしかもLCMARCⅡは20%前後のカバー率しかもたない場合である。LCによれば、英語以外のMARC化やRECON計画による溯及的MARCの実現も計画されているが、これらMARC以外の目録の作成がどう考えられて行くかは今後の課題となる。しかし国連のユネスコ統計1971年版によれば、専門分野別発行点数は約48万3千(以下千未満は四捨五入)点で本学では、社会科学約11万、語学1万6千、文学9万8千、地理・歴史3万3千が主で、それは約24万点で50%弱が対象となる。言語別発行点数25万点では英語2万1千、仏語7千、独語1万1千、スペイン語2万5千、ロシア語6万1千、その他12万6千点でその他を除いて、約半数がLCMARCの可能になることが考えられる。このことから近い将来カバー率は大きく上昇することが予測され、ロシア語の図書で最近記述データがCIP(Cataloging in pub.)で作られている例など目録への負担は軽減されることも考えられる。

以上、大まかにMARCの将来と目録政策について考えられる所を書いたが、上記のような問題をのこしつつもMARCが与える影響は大きく、各館の実状に即した対応を通して、図書館界で目録政策がとられることを期待したい。なぜならMARCを通した目録政策が図書館行政の要となるからである。

(整理係長 布川 嘉佑)



## 図 書 館 と 私

あまり勤勉でない学生が、図書館について書くというのは、なにか気恥ずかしい気がする。

外大の貧困な設備の中にあつて、図書館も例外にもれずあまり立派なものとはいえない。試験が近づくと、座席を確保するのがむずかしいくらい狭い閲覧室。冬になれば、破れた窓ガラスの隙間から吹き込む風に震えながら机に向うこともある。しかし、図書館は、この外大の中で唯一のオアシス的な存在だといえよう。他の大学のように専門の研究所を持たない外大にとって、アカデミックな面においては、もちろん言うまでもない。また、学生の憩う場所の少ないこの大学では、夏の生協のうだるような暑さから考えると、クーラーも扇風機もないけれど、別天地のように涼しい所である。冬の寒い教室のことを思うと、ガスストーブの火は、私たちをやさしく迎えてくれる。だから図書館に行つて、なにがしかの本を開けていると言え、あまりにもふとどきだろうか。外大の図書館が、本来の勉強の場であると共に、おしゃべりの場と化していることが、おうおうにしてあることも、今の現状から考えると、一概に近頃の学生気質を攻められそうもないように思えるのである。

私も、このオアシスで、なんやかんやとお世話になること、四年目になった。最終学年を迎えるようになって、やっと図書館というもののほんとうの利用法や、機能が、少しわかってきたのも皮肉なものだ。これも、卒論という必然にせまられてのことだから、あまりほめられたものでもない。

この三年間を振り返ってみると、図書館といえば、次の授業のために、必死で単語を引いたり、試験前にクラスの友人と何人か集まって、わからないところを聞きあうための場所だった。いつかの試験前には、あまりのうるささに、数回司書の人に注意されたこともあった。また、図書館は、親しい友人がお互いに悪友になってしまう所でもある。今までに何度勤勉な人々の勉学を、雑談でじゃましただろう。自分が、人の雑談をうるさく感じるようになって、人の受けた不快さがわかる。肝心の本を利用する方においては、もっぱら他からの強制のある時限りであった。レポートの提出前にあわてて、書架をあさるという状態で、図書閲覧票は、毎年、 $\frac{1}{4}$ もうまらない。

こういう図書館の利用しかしていない私は、今さらながら自分の得た知識の薄っぺらさを悲しく思う。本来、大学には、自分なりにアカデミックな目標を持ち、学問をするために入ってきたはずであった。なのに、もう最終学年を迎えた自分は、どうなのか。片言の語学と、妙なエリート意識の外になにを身につけたのだらうと、自問することがある。ここで、「図書館と私」などと言って、図書館の存在を真剣に考えてみる立場に置かれると、自分のすごした

大学での生活が悔まれてならない。やっぱり大学は、与えられた事を従順にやるだけの所ではなく、自分で自分の学問への道を切り開いていく所なんだ。机の上の、本の上の知識が、以前よくさげばれたように、どれくらい現実の人生の上で、働くかは知らない。でも、学問の場である大学では、誰が何を言おうとこのことは（本の中から知識を得る）は、否定できない。一概に言い切つてしまえないだろうが、図書館の本を利用する回数と、その人の得た教養は、比例するように思えてならない。

卒論のおかげであるが、残り少ない大学での勉強の時間を、よく図書館に足を運ぶ今頃である。閲覧カードの引き出しを引いては、こんな本もある、あの本がとうとう見つかったと喜びながら、思ったより蔵書の多いのに驚く。ようやく、無気力気味な平均的外大生の私にも、図書館が、ほんとうの意味でも、オアシスになってきた。

（ドイツ語学科4年生 藤原 史子）

## 洋書の利用状況について

ここでいう洋書とは外国語で書かれた図書のこと、西言語だけではなく、中国語、朝鮮語、その他東洋諸国語を全部含めて洋書ということにします。外国語大学の学生がどれくらい、又どのように洋書を利用しているかということ、を例年の統計を中心に少しくわしく調べてみました。48年度では学生の貸出冊数19,403冊のうち洋書は4,767冊（24.6%）、47年度では18,985冊のうち洋書4,913冊（25.9%）となっており、だいたい貸出数の四分の一が洋書という見当になります。NDC10区分による貸出数をみてみますと次のようになります。

分 類	貸 出 数	洋 書	対和書比
0 総 記	948冊	175冊	18.4%
1 哲 学	1,469	189	12.8
2 歴 史	2,269	504	22.2
3 社会科学	3,994	546	13.7
4 自然科学	532	13	2.4
5 工 業	90	14	15.5
6 産 業	167	21	12.5
7 美 術	446	35	7.8
8 語 学	3,010	1,493	49.6
9 文 学	6,085	1,747	28.7
そ の 他	393	30	7.6
計	19,403	4,767	24.6

上記のように洋書の貸出冊数が最も多いのは文学部門ですが、和書との比率をみますと語学の部門が49.6%でおよそ和書・洋書半々になります。文学と語学のところを更にくわしく調べてみました。

8 語 学		9 文 学	
分 類	冊数	分 類	冊数
語 学 総 記	302	文 学 総 記	34
日 本 語	18	日 本 文 学	23
中 国 語	108	中 国 文 学	396
東 洋 諸 国 語	270	東 洋 諸 国 文 学	165
英 語	194	英 米 文 学	319
ド イ ツ 語	151	ド イ ツ 文 学	99
フ ラ ン ス 語	42	フ ラ ン ス 文 学	164
イ ス パ ニ ア 語	154	イ ス パ ニ ア 文 学	224
イ タ リ ア 語	6	イ タ リ ア 文 学	5
ロ シ ア 語	225	ロ シ ア 文 学	315
その他の諸国語	23	その他の諸文学	3
計	1,493	計	1,747

語学部門の洋書はどこの国の言語が多く読まれているかというより、先ず目立つことはNDC801にあたる言語学が多いということです。このことは和書についてもいえます。文学部門では中国文学、英米文学、ロシア文学、イスパニア文学、フランス文学の順によく利用されております。語学部門の829(東洋諸国語)、文学部門の929(東洋諸国文学)も多いのですが、これらの部門は簡単に分けても10ヶ国以上の言語がありますので全部調べられなかったことです。文学の方ではヒンディ文学が一番多いのではないかと思います。次に利用者層を学年別にみますと次のようになります。

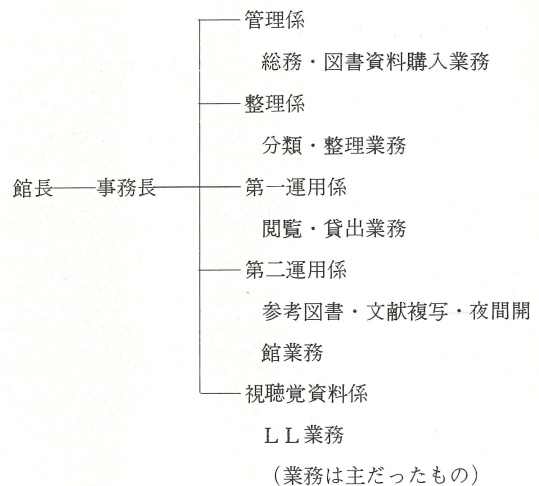
学 年	1	2	3	4	Ⅱ部	院 生	其 他	計
冊 数	151	307	827	1897	726	623	236	4767

利用対象者数からみますと院生の利用が最も多いわけですが1年から順次増加し、3年から4年にかけて急激に増えているのはやはり卒論の関係であろうと思われます。

今回は語学と文学の部門を数的にとらえただけに終わりましたが、社会科学、歴史、哲学など分析してみると非常に面白いのではないかと思います。

(第三運用係長 伊藤 和子)

## 図書館の事務機構



## 編 集 室

- 本学附属図書館も、館報、界になかまいました。今後よろしく。
- 編集委員長(事務長)の10年来の願望、館報、発行が実現し、まずはめでたし、めでたし。
- 創刊号にふさわしく、学長・館長・図書委員長・同委員並びに多数の館員の方々に登場願いました。カットは、沢山輝彦氏(管理係主任)の力作です。沢山氏は、画歴10年、東方美術協会の中堅として活躍中です。
- 次号は、1月の予定です。図書館利用者のパイプ役として、また大阪外大附属図書館の特色を大いに発揮したいと編集長は今からはりきっています。ご期待ください。

大阪外国語大学附属図書館、館報、  
発行 附属図書館

No. 1 1974. 9

大阪市天王寺区上本町八丁目  
電話 (06) 772-1271

印刷 セイエイ印刷

大阪市城東区蒲生町2-1